

学校評価は、子どもたちがより良い教育を享受できるようにその教育活動等の成果を検証し学校運営の改善と発展をめざすための取組です。保護者や地域からの期待に応えるとともに、より信頼される学校づくりをめざして今年度のアンケート結果を分析し、来年度に向けた課題を明らかにしたいと考えます。

○調査時期 令和7(2025)年12月

○調査方法 児童・保護者・教職員＝アンケートフォームで回答

○調査人数・・・児童201(回答195)名(回答率97.0%) 保護者141(回答154)世帯(回答率91.5%) 教職員20名

○評価点 4=そう思う 3=ややそう思う 2=あまりそう思わない 1=そう思わない

○考察・・・4+3を肯定的評価, 2+1を否定的評価ととらえる。

90%以上 80%以上 70%以下

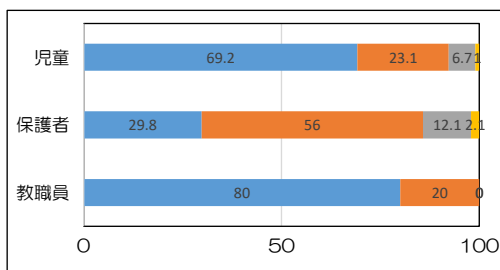
1 いじめのない学校づくりについて

- 児童 1. いじめのない楽しい学校生活を送ることができていますか。
- 保護者 1. いじめのない楽しい学校だと思いますか。
- 教職員 1. 学校は、いじめのない楽しい学級・学校づくりに取り組んでいますか。

	4	3	2	1	4+3	R6との比較
児童	69.2	23.1	6.7	1	92.3	0.6
保護者	29.8	56	12.1	2.1	85.8	0.2
教職員	80	20	0	0	100	5

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
児童	6.4
保護者	2.6
教職員	4.2



(考察)

本年度の評価結果は、児童・教職員ともに肯定的な回答が90%以上、保護者においても80%以上という高い数値を得ることができた。この背景の一つとして、本年度は特に高学年において、弁護士を講師として招いた「いじめ防止授業」を実施したことが挙げられる。法的な視点からいじめの本質を学ぶ機会を設けたことで、児童のいじめに対する当事者意識や規範意識が醸成され、数値の向上に大きく寄与したと考えられる。一方で、肯定的な評価が多数を占める反面、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した児童が一定数存在するという事実、我々は真摯に耳を傾けなければならない。学級や学校は、全ての児童にとって安全・安心の場であり、楽しく過ごせる場であるべきである。学校生活に不安を感じている児童が一人でもいる限り、学校はその声と真正面から向き合う必要がある。今後も、教職員は一致団結し、「いじめを見逃さない高い意識」と「いじめ根絶・解消に向けた強い決意」を堅持し、日々の指導に邁進しなければならない。全ての教職員が、生徒指導上の諸問題を「自分自身の問題」として捉え、自己研鑽に努めることが不可欠である。さらに、児童一人一人の人權を尊重し、教職員と児童、あるいは児童相互の間に、信頼に基づいた温かな人間関係を構築していくことが肝要である。日々の授業の充実はもとより、人權教育・道徳教育・生徒指導を教育活動の柱とし、児童の豊かな心を育てよう、教職員一同、さらなる努力を積み重ねていきたい。

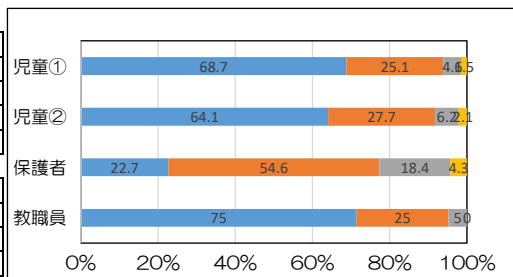
2 あいさつについて

- 児童 1. 先生や友達にあいさつをしていますか。①
2. 家族や地域の方にあいさつをしていますか。②
- 保護者 2. 子どもたちは、家庭や地域の方に挨拶がよくできていると思いますか。
- 教職員 2. 児童は教職員や友達に挨拶をよくしていると思いますか。

	4	3	2	1	4+3	R6との比較
児童①	68.7	25.1	4.6	1.5	93.8	2.8
児童②	64.1	27.7	6.2	2.1	91.8	4.1
保護者	22.7	54.6	18.4	4.3	77.3	11.7
教職員	70	25	5	0	95	5

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
児童①	0.9
児童②	5.9
保護者	12.9
教職員	4.5



(考察)

あいさつは、よりよい人間関係を築くための第一歩であり、コミュニケーションづくりの基本である。本校では「気持ちのよいあいさつ」の励行を重点目標に掲げ、教育活動全体を通じて取り組んできた。今年度のアンケート結果は、児童・保護者・教職員の全対象において肯定的な回答が昨年度を上回る上昇を見せた。特に昨年度、児童の自己評価に比べ低迷していた保護者の肯定的な評価が上昇に転じたことは、学校での取り組みが家庭や地域にまで届き始めた成果として非常に喜ばしい。この改善の背景には、今年度も継続して取り組んできた児童会を中心とする「あいさつ運動」の活発化がある。児童が主体となって呼びかけを行うことで、自分たちの問題としてあいさつを捉える意識が定着した。また、教職員自らが率先垂範してあいさつを実践したことで、児童との良好なコミュニケーションの土台が築かれ、それが学校全体の明るい雰囲気づくりにつながったと考えられる。一方で、数値が向上したとはいえ、地域の方へのあいさつや、状況に応じた丁寧なあいさつについては、まだ伸びしろがある。今後は、時と場所、相手に応じたふさわしいあいさつができるよう、発達段階に応じたきめ細やかな指導を継続していく必要がある。今後も、毎日のあいさつ運動を柱とすつ、学校・家庭・地域が一体となって「あいさつが響き合う学校づくり」を推進していく。教職員が引き続き範を示しながら、児童一人一人が自信を持って、明るく丁寧にあいさつができるよう、粘り強く指導に努めていきたい。

3 学校のきまりについて

- 児童 3. 学校のきまりや約束を守って生活することができていますか。
 保護者 3. 子どもたちはきまりや約束を守っていると思いますか。
 教職員 3. 児童は学校のきまりや約束を守って生活をしていると思いますか。

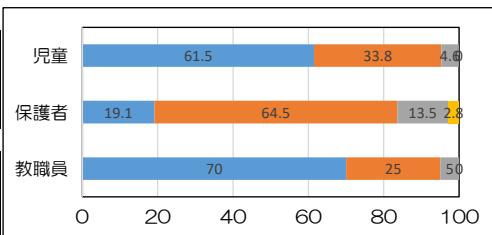
		4	3	2	1	4+3	R6との比較
3	児童	61.5	33.8	4.6	0	95.3	↑ 7.6
3	保護者	19.1	64.5	13.5	2.8	83.6	↑ 0.1
3	教職員	70	25	5	0	95	→ 0

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
児童	↑ 2.3
保護者	↓ 1.4
教職員	↑ 12.1

(考察)

「廊下は右側を静かに歩く」「チャイムを守って行動する」「忘れ物をしない」「交通ルールを守る」等、児童が守るべき項目は多岐にわたる。これらの日々の意識と実践の積み重ねこそが、規範意識を高める基礎・基本となる。今年度のアンケート結果では、特に児童の肯定的評価が昨年度より7.6%上昇した。これは、きまりを単なる「制限」として捉えるのではなく、「きまりを守ることが、自分たちの生活を安全で楽しいものにする」という意識が児童の中に育ってきたことの表れであると受け止めている。昨年度、児童・保護者の肯定的評価がやや低下していたことを踏まえ、今年度はきまりの意義を丁寧に指導してきた成果が、児童の主體的・能動的な姿勢に結びついたと言える。この好ましい変化を、学校内だけでなく家庭や地域での生活においても実践できるように促していくことが今後の課題である。そのためには、家庭と密に連携し、家庭でのしつけと学校での指導を一体化させることが不可欠である。今後とも懇談等を通じて情報交換を密に行い、学校と保護者が同じ方向を向いて子供たちの成長を見守る体制をさらに強化していきたい。教職員一同、今回の改善結果を励みとしつつ、全ての教職員が児童の規範意識の育成に責任を持ち、温かい雰囲気のある学校づくりを目指していきたい。児童が自ら進んできまりを守ろうとするような、魅力的な学校生活の構築に向け、今後も様々な工夫を凝らし、指導の充実に努めていきたい。



4 清掃・美化について

- 児童 4. そうじをがんばっていますか。
 保護者 4. 子どもたちは、校舎内の美化に積極的に取り組んでいますか。
 教職員 4. 本校は、校内の環境美化に積極的に取り組んでいますか。

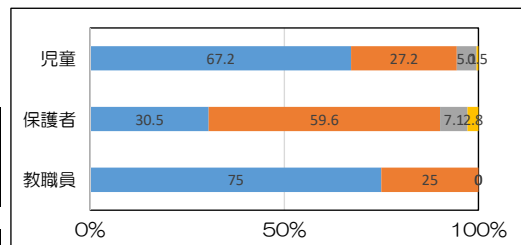
		4	3	2	1	4+3	R6との比較
4	児童	67.2	27.2	5.1	0.5	94.4	↑ 3.8
4	保護者	30.5	59.6	7.1	2.8	90.1	↑ 4.8
4	教職員	75	25	0	0	100	→ 0

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
児童	↑ 4
保護者	↑ 8.8
教職員	↑ 4.2

(考察)

学校の美化に関するアンケートでは、児童の肯定的評価が昨年度より3.8%、保護者の肯定的評価も4.8%上昇した。特に児童の肯定的評価は90%を超えて維持されており、当麻小学校の学び舎に愛着を持って清掃活動に励む姿が定着している。これらの取り組みを反映し、教職員の肯定的評価が今年も100%に達したことである。全教職員が美化活動の意義を共有し、組織として一貫した指導を積み重ねてきた結果である。教職員は今後も、校内の整理整頓に努め、自らの教室だけでなく校内全体に目を配った指導を続けていきたい。教職員自らが「整っていることの心地よさ」を体現し、率先垂範することで、児童の「きれいにすると気持ちが良い」という感性をさらに磨いていきたい。また、学校・地域パートナーシップ事業コーディネーターを中心としたボランティアによる環境美化活動も、本校の大きな支えとなっている。常に美しい花が咲き、クリンタイム等を通じて地域の方々と共に汗を流す経験は、児童の美化意識の向上に多大な効果をもたらしている。本年度は創立150周年を迎え、母校愛を育む機会が多かったことも高評価につながって面も否めない。自分たちの学び舎が、多くの地域の方々の協力によって維持されていることへの感謝の念を育むとともに、「物を大切に作る心」や「使った後はきちんと片付ける習慣」が児童の生涯にわたる力となるよう、今後も粘り強く指導を推進していきたい。



5 授業について ①

- 児童 5. 授業はわかりやすいですか。
 保護者 5. わかりやすい授業が行われている学校だと思いますか。
 教職員 5. 本校は、わかりやすい授業に努めていますか。

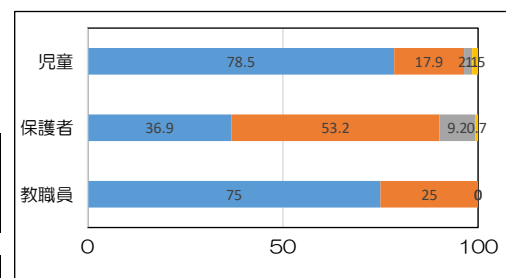
		4	3	2	1	4+3	R6との比較
5	児童	78.5	17.9	2.1	1.5	96.4	↑ 3
5	保護者	36.9	53.2	9.2	0.7	90.1	↑ 6.7
5	教職員	75	25	0	0	100	→ 0

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
児童	↑ 5.7
保護者	↑ 4.5
教職員	↑ 4.2

(考察)

授業の分かりやすさに関するアンケートでは、児童の肯定的評価が95%を超える極めて良好な数値を示した。これは、本校の教育活動の根幹である「日々の授業」が児童が分かりやすいと感じているということであり、非常に喜ばしい結果である。この成果の要因として、第一に令和5・6年度の2年間にわたる国語科の研究が挙げられる。「読む力」の育成を柱とした組織的な授業改善の取り組みが、児童の理解を深める確かな土壌となった。第二に、本年度特に重点を置いた探究活動の充実がある。児童が自ら問いを立て、進んで学びに向かう姿勢を重視したことが、学習への興味・関心を高め、「分かる」実感へとつながったと考えられる。また、本校は1～5年生が単学級であるが、その特性を活かし、教職員同士が学年の枠を超えて日常的に相談・対話し合える環境がある。この緊密なチームワークが、個々の児童に応じたきめ細やかな指導体制を支え、授業の質的向上に大きく寄与している。一方で、肯定的評価が95%に達したとはいえ、依然として「分かりにくい」と感じている児童が少数ながら存在することを忘れてはならない。「教師は授業で勝負する」という矜持をもち、ICTの効果的な活用や個別最適な学びの実現に向けて、今後も自己研鑽を積むことが不可欠である。今後も、これまでの研究成果を土台としつつ、教職員一人一人が学び続ける姿勢を堅持し、児童全員が「学ぶ楽しさ」を実感できる授業づくりに邁進していきたい。



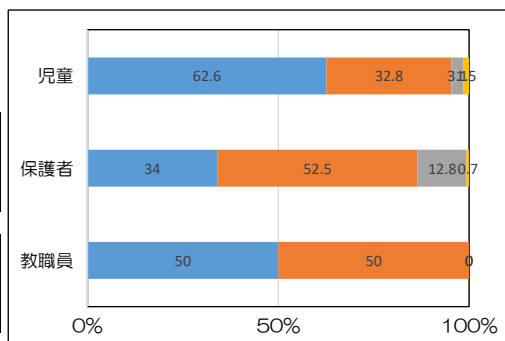
6 授業について ②

- 児童 6. 授業中、先生の話をよく聞いていますか。
 保護者 6. 子どもたちは、授業中、先生の話をよく聞いていると思いますか。
 教職員 6. 子どもたちは、授業中、話をよく聞いていますか。

		4	3	2	1	4+3	R6との比較
6	児童	62.6	32.8	3.1	1.5	95.4	↑ 3
6	保護者	34	52.5	12.8	0.7	86.5	↑ 3.7
6	教職員	50	50	0	0	100	→ 0

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
↓	0.2
↑	1.4
↑	12.5



(考察)

授業中に話を聞いているかを問う項目については、教職員の肯定的評価が昨年度に引き続き100%を維持した。加えて、児童の肯定的評価が3%、保護者の肯定的評価も3.7%上昇しており、学校全体として非常に良好な状態にある。これは、本校が「当麻スタンダード」をもとに、学習規律の確立や「聴く力」の向上を粘り強く指導してきた成果である。昨年度から継続して取り組んできた「話をする人の顔を見る」「うなずきながら聴く」といった具体的な指標の提示が、児童の意識に深く浸透している。また、児童の「聞く(聴く)」という活動が、単なる受動的な態度に留まらず、学習効果として「効く」レベルへと深化していることが、保護者の評価向上にも繋がったと考えられる。今後は、この学習規律をベースとして、児童相互の「友達との対話」をさらに大切にしていきたい。相手の話を真摯に聴き、それを受け止めた上で自分の考えを深めていく「対話的な学び」を充実させることで、個の学びを集団の学びへと発展させていく必要がある。児童が主体的に「きく」ことができる魅力ある授業づくりは、指導者側の不断の努力にかかっている。今後も、聞くこと・対話することの価値を児童に伝え続け、安心感の中で互いの考えが響き合う温かな教室環境の構築を目指していきたい。

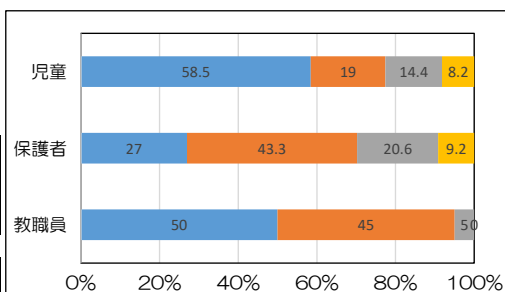
7 家庭学習について

- 児童 7. 家庭で宿題やそれ以外の勉強をしていますか。
 保護者 7. 子どもたちは家で宿題やそれ以外の勉強をしていますか。
 教職員 7. 児童は家庭学習に取り組んでいると思いますか。

		4	3	2	1	4+3	R6との比較
7	児童	58.5	19	14.4	8.2	77.5	↓ 3
7	保護者	27	43.3	20.6	9.2	70.3	↑ 4.1
7	教職員	50	45	5	0	95	↑ 5

回答数	
児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
→	0
↑	3.4
↑	12.3



(考察)

家庭学習に関する項目については、児童・保護者ともに肯定的な回答が本年度の調査項目の中で最も低い数値となった。家庭学習が定着しない要因としては、昨年度同様、習い事や遊びの優先、課題の量や難易度のミスマッチなどが考えられる。児童にとって家庭学習が「やらされる苦痛なもの」になっていないか、我々教職員も指導の在り方を再考しなければならない。今後は、これまでの啓発活動に加え、以下の具体的な改善策を講じることで、家庭学習の質の向上と定着を目指す。

- ①「自学自習」へのシフトと内容の工夫
一律の宿題だけでなく、児童が自らの興味や課題に合わせて取り組む「自主学習」を推奨し、その頑張りを学校で価値付ける仕組みを強化する。
- ②ICT(一人一台端末)の有効活用
タブレットを持ち帰り、デジタルドリル等を活用することで、個々の理解度に応じた「個別最適な学び」を提供し、学習のハードルを下げる工夫を行う。
- ③家庭との双方向の連携強化
懇談会などを通じて、具体的な「声掛けの例」や「学習環境の整え方」など、より実践的な情報を共有する。
生涯にわたって「学び続ける力」を育むためには、家庭学習を単なる宿題の消化ではなく、基本的な生活習慣の一つとして確立させることが不可欠である。学校・家庭・地域が危機感を共有し、児童が「わかった」「できた」という達成感を得られる学習習慣を構築できるよう、全力を挙げて取り組んでいきたい。

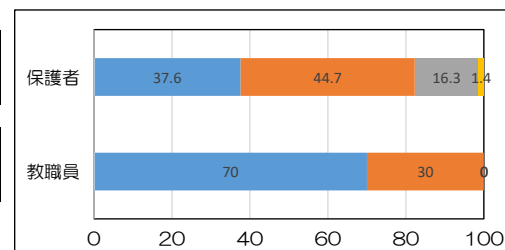
8 内容理解について

- 保護者 8. 教職員は、児童が学習理解しているかどうか気を配っていると思いますか。
 教職員 8. 児童が学習内容を理解しているかどうか気を配っていますか。

		4	3	2	1	4+3	R6との比較
8	保護者	37.6	44.7	16.3	1.4	82.3	↑ 8.4
8	教職員	70	30	0	0	100	→ 0

回答数	
保護者	141
教職員	20

R5との比較	
↑	0.2
→	0

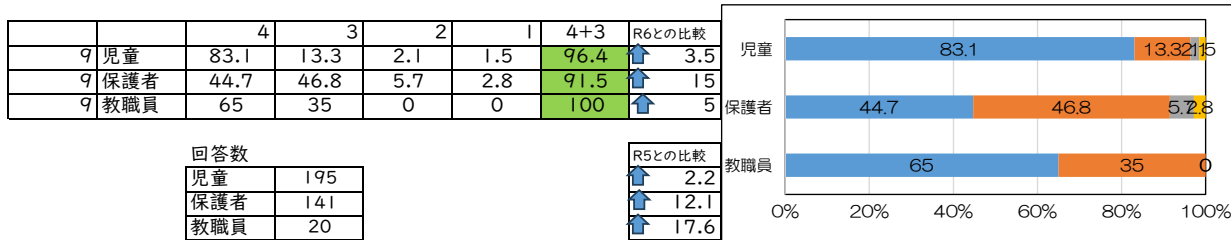


(考察)

児童の学習理解に対する教職員の配慮について、本年度の保護者の肯定的評価は82.3%となり、昨年度の73.9%から8.4%の大幅な上昇を見せた。昨年度課題となっていた保護者評価の低下に歯止めがかかり、改善傾向に転じたことは、教職員が日々の授業において児童一人一人のつまずきに寄り添い、きめ細かな指導を積み重ねてきた成果である。今年度は、昨年度から導入した朝学習による基礎・基本の徹底に加え、授業内での机間指導や個別の声掛け、ICTを活用した習得状況の把握など、教職員が「個々の理解度を看取る」意識を高く持って取り組んできた。保護者評価の上昇は、こうした学校現場の熱意が家庭にも伝わり始めたのではないかと感じている。しかしながら、依然として教職員の自己評価(100%)と保護者評価の間には17.7%の乖離があることを忘れてはならない。保護者の中には、まだ「自分の子供の理解状況まで十分に手が届いていないのではないか」という不安を感じている方が一定数存在する。数値が向上した今こそ、さらに質を追求し、真の意味での「誰一人取り残さない授業づくり」に邁進する必要がある。今後は、授業の省察をさらに深め、個々のつまずきを即座に指導に活かすとともに、家庭と学校が「子どもの学び」を共に支えるパートナーとして信頼関係をさらに深められるよう、教職員一同、寄り添う指導を継続していきたい。

9 体力作りについて

- 児童 8. 学校で外遊びや体育の授業をがんばっていますか。
 保護者 9. 子ども達は進んで運動や外遊びをしていますか。
 教職員 9. 学校は体育の授業や外遊びを中心に体力づくりの取組を推進していると思いますか。

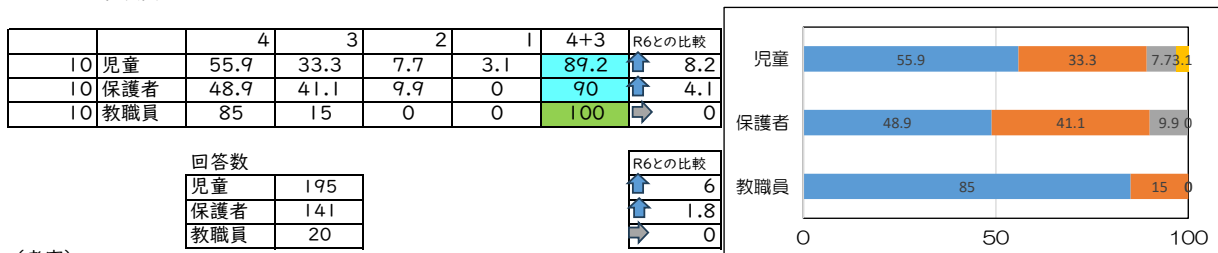


(考察)

体力作りに関する項目では、児童の肯定的評価が3.5%上昇し96.4%という極めて高い数値を示した。加えて、昨年度は76.5%に留まり課題となっていた保護者の肯定的評価が、本年度は91.5%と15%と大幅に上昇した。昨年度見られた児童・教職員と保護者との意識の乖離が解消され、学校の体力づくりの取組が家庭からも高く評価・信頼されていることは、大きな喜びである。この飛躍的な数値向上の背景には、業間休みや昼休みを活用した学級遊びの設定、なわとび集会、跳び箱月間の実施など、児童が目標を持って楽しみながら運動に親しむ環境づくりを継続・強化してきた成果がある。また、体力・運動能力テストの結果に基づいた意図的な体育指導を年間計画の中に明確に位置付け、学校全体で運動量の確保に努めたことが、児童の充実感や成長として保護者にも伝わったと考えられる。生涯にわたって健康を保持・増進しようとする意欲の醸成は、教育の重要な柱である。今後は、これまでの取組をさらに継続・発展させ、児童が自ら進んで外遊びをしたり、多様な運動に挑戦したりする「動くことの大好きさ」を育てていきたい。同時に、学校での活動を家庭へさらに発信し、休日等の運動習慣とも連動できるよう家庭・地域との連携を深めていく。児童一人一人が自己の体力の向上を実感し、健やかな体と心を育てていけるよう、教職員一丸となって体育的行事や日常の指導の充実に努めていきたい。

10 教育相談について

- 児童 9. 先生に、相談することができますか。
 保護者 10. 学校は、児童や保護者からの相談に応じていると思いますか。
 教職員 10. 本校は児童や保護者からの相談に応じていますか。

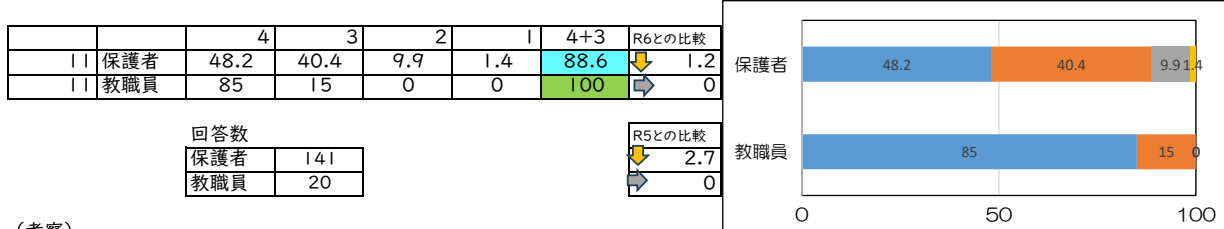


(考察)

教育相談に関する項目では、児童の肯定的評価が昨年度より8.2%上昇し(89.2%)、保護者の肯定的評価も4.1%上昇(90%)した。昨年度課題となっていた教職員の意識と児童・保護者評価との乖離が大幅に縮小したことは、日頃から児童の小さな変化に注意を払い、組織的に見守り・共有してきた成果であると言える。しかしながら、数値が向上した一方で、いまだ約10%の児童および保護者が、相談をためらったり、十分に寄り添われていると感じられていなかったりする現状を我々は深く受け止めなければならない。学校が全ての人にとって「安心を担保する場」であるためには、この10%の声にこそ、より真摯に向き合う必要がある。児童が発達段階に応じて抱える悩みは多様化しており、教職員には、心を開くきっかけをつくる「専門性」と「共感性」がこれまで以上に求められている。そのためには、家庭訪問や個人面談といった既存の枠組みをより丁寧に行うことはもちろん、教職員全体で教育相談に関する研修を深め、児童や保護者の良き相談相手として「あるべき姿」を絶えず問い直していく必要がある。今後も、一人一人の児童にしっかりと寄り添い、家庭との信頼関係をさらに強固なものにできるよう、全教職員が教育相談の資質向上に励んでいく。誰一人として孤立させない、温かな支援体制の構築に向けて、引き続き努力を重ねていきたい。

11 情報提供について

- 保護者 11. 学校は、「学校だより」「学年通信」、ホームページ等を通じて、家庭に学校の情報を積極的に伝えられていると思いますか。
 教職員 11. 本校は、「学校だより」「学年通信」、ホームページ等を通じて、保護者に学校の情報を積極的に伝えていていると思いますか。



(考察)

情報提供に関するアンケート結果は、昨年度と同様に保護者・教職員ともに高い肯定評価を得ており、概ね良好な水準を維持することができた。学校だよりや全学年だよりの発行に加え、学校ホームページの小さな更新を継続したことが、学校の状況を可視化し、保護者の安心感につながっていると考えられる。特に本年度は、創立150周年という記念すべき節目を迎え、その記念事業や関連する教育活動について積極的に発信を行った。学校ホームページや通信を通じて、150年の歴史を祝う児童の活動や地域との連携事業を多数紹介したことは、学校の教育方針や願いを保護者・地域に広く伝える絶好の機会となり、学校への理解と協力をより一層深める一助となった。一方で、今後の課題として取り組むべきは、集団全体への発信に加え、児童一人一人に焦点を当てた「個への発信」の充実である。学校全体や学年単位の動きは伝わりやすくなっているが、個々の児童が日々どのように成長し、どのようなまぎさを克服しようとしているのかという、より「個」に寄り添った情報を丁寧かつスピーディーに共有していくことが大切である。保護者や地域の方々の強固な信頼関係を築くためには、正確な情報提供はもちろんのこと、教職員の思いが伝わる「双方向の対話」を意識した発信が不可欠である。今後も緊急時の迅速な対応を徹底しつつ、学校・家庭・地域が手を取り合って児童を育て「協働の基盤」としての情報発信に、より一層努めていきたい。

12 主体的な学習について(令和7年度より調査開始)

- 児童 10. 自分から進んで調べたり、学習したり、行事に参加したりしていますか。
 保護者 12. 学校は、子ども達が主体的に学ぶような取組を行っていますか。
 教職員 12. 本校は、子ども達が主体的に学ぶような取組を行っていますか。

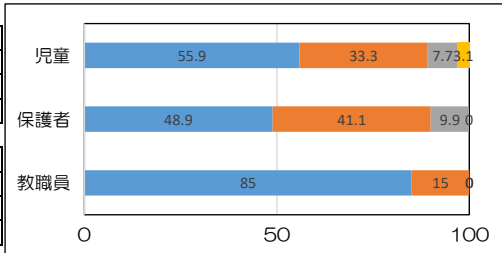
		4	3	2	1	4+3	R6との比較
12	児童	51.8	36.9	7.2	4.1	88.7	調査なし
12	保護者	39	49.6	10.6	0.7	88.6	調査なし
12	教職員	75	25	0	0	100	調査なし

回答数

児童	195
保護者	141
教職員	20

R5との比較

調査なし
調査なし
調査なし



(考察)

本年度より新設した本項目では、児童の肯定的評価が88.7%、保護者が88.6%、教職員が100%と、初年度から極めて高い数値を示した。変化の激しいこれからの社会を生き抜く子供たちにとって、「自ら問いを立て、進んで解決しようとする主体性」を育むことは、現代の教育における最重要課題の一つである。この今日的な課題に対し、本校の教育活動が正面から向き合い、着実な成果を上げていることがこの結果から読み取れる。この高い評価の背景には、本年度の研究課題として取り組んだ「探究活動の充実」がある。特に11月の「わくわく発表会」では、全ての学年が「地域」という身近で奥深い題材を扱い、自ら調べ、まとめ、発信するプロセスを経験した。この探究の過程が、児童にとって「やらされる学習」から「知りたい、伝えたい学習」へと変容する一つのきっかけになったように思う。また、本年度も「体験活動」を重視した学習活動を適宜取り組んだ。本物に触れ、地域の方々と交流する直接体験は、児童の知的好奇心を強く刺激し、行事や学習への能動的な参加意欲を引き出す源となった。保護者の評価が児童とほぼ同水準で高いことは、学校での生き生きとした学びの様子が、家庭へも確実に伝わっているようで嬉しい限りである。教職員の自己評価が100%であることは、探究学習を推進する指導体制への自信の表れであるが、今後はこの「主体性」を特定の行事や学習だけでなく、日々の全教科・全教育活動においていかに持続・発展させていくかが鍵となる。今後も、児童一人一人の「学びたい」という気持ちを大切に、体験と探究を両輪としたカリキュラムの質をさらに高め、自律した学習者の育成していきたい。